外組八十七組之内 第二

空蟬香　盧橘香
蓮華香　蓮香
納涼香　晩夏納涼香
氷室香　七夕香
昼千種香　秋夜香

ヲ多 9
1338
37

外組香八十七組之内 第二

空蝉香　盧橘香

蓮葉香　蓮香

納涼香　晩夏納涼香

氷室香　七夕香

昔千種香　秋夜香

門 ヲ多9
號 1338
冊 37

空悼香

香二種

一種を五包ニ拵ヘ置

一種を客にて一包ニ拵ヘ置

先始に一の香五包を一二三四五とかし絡よ

して香包文一包めとし客香を入る再文て
炷き出し候香記紙にて一二三四五と
認め何番目客香とする儀に名を付て
出香の南とに点載空蝉と名付以半紙
空蝉の巻に執筆より書記の面すてに左のごとし

空蝉香之記

一ウ

二一四ウ五

名　一二三ウ四五

名　一ウ二ウ三四五

月日

出香　名乗

記録之ニ順ニ書ス　但此組香ハ香を出して
[illegible]似たる木を聞合ニ書ス　又一炷ニ
始ニ客を入三包ニして　打交内一包
除キ残り五包を出し　有時之見合ニ致
書　何番ともなしニ香を聞書ス

盧橘香

香三種

葉として　四包作内一包試

花として　二包作無試

実として　一包作無試

右試香おハりて出香六包交合炷出すへし
記録名目あり左のごとし
花二炷ずつ聞りの下に　花菫紫麝と書
實ずつ聞りたる下に　枝繋金鈴と書
無実のずまとて　名目なし

全人ずつの下に歌一首出す左のごとし
五月まつ花橘の香をかげば
むかしの人の袖の香ぞする
記録の奥に詩を書
枝繋金鈴春雨夜
花薫紫麝凱風程
右記録の図そへて左のごとし

葉｜
花｜
実｜

橘香之花
葉実木木葉葉

名　葉花実葉葉木葉　二

名　花実葉葉葉木　枝繋全鋭　二

名　葉実木木葉葉
五月待花橘の香をかけハ昔の人の袖の香ぞする　全

枝繋全鋭春雨後花菫紫靄飄風程

月日　　出香　名乗

記録も二書入様

花の香二花の内一花と葉とを合せて一葉ハ花と実とハ木と花とを識也残るまま頭ハ点ニ記し候

連葉香

香三種

一ノ香　三包ニ作リ試

二ノ香　四包ニ作内一包試

三ノ香　右同断

右試おゐて 先定所に 一の香二包より
二三まで包て 打交四包焼出す 試に
合セ名乗紙に 書付させ 但一ハ客試
二焼のものと 一と書すて 一二三とも
書せて 硯箱を出也 一の香二包あらは

たとへハ これ 此香の 極意なり 次に残りの
二三の香 四包有を 打交 内より 二包を
焼出す 二三と 出れは 記紙に 玉露と書附
出す 一二三 二と 出れは 露玉と 書 二二
と出れは 玉くと 書 三三と 出れは 露く

し出付出来事也又本香まて二つと成三つ
玉と書事も珞と書て夫を其後に
出事也是歌の言葉に依て入候る
あり露を露玉を玉と合され点有
あり露と玉玉と露と合たる有り

あり併二種同香出れは本香の下に歌
一首出別香すれは記録の奥に歌を出事
歌左のことし
たちはなのまとはるゝ袖の心ゆて
何露落と玉と見まし

狂花の面とて香左のごとし

蓮葉香之記

なす なち 玉家

名 なすちな 露玉 四

名 なすなすなち 玉露 四

一 なちなちなの間にまちなはて何度あるとも玉とあるべし

月日 出香 名乗

きくきくねまきへんまきし

皆中ハ六点とす

東福門院様御作
蓮香

香四種

荷葉として　四包作内一包試

開花として　右同断

月影として　二包ニ作無試

香風之文　右同断

右試香二種の内ニて出香十包を先文字
荷葉三包ニ月影の二包を以五包を打交
炷出し聞試ニ試ニて其香ニ聞次聞
三包ニ香二包を打交其聞中組試同

其内ニて後ニ各乗紙を炷出し聞紀録
後紙先本香包を開きて其ニ各乗紙
小今(?)全の人ニ其の名ニ詩ニ句一行ニ書聞
其外の者ハ荷葉開花ホの名目を
書聞詩句たの二とし

葉展影飜當砌月花閒香散入簾風

右初後の二炷にて上二句の香あらはるゝ

残の通まてつき左のことし

蓮香記

荷葉 閒花

月 月氣 香風

荷葉 月氣 荷葉 月氣 荷葉 香風

香風 閒花 閒花 閒花 閒花

名

荷葉 荷葉 荷葉 月氣 月氣 月氣 香風 閒花 閒花 閒花 香風 六

名

葉展影飜當砌月花閒香散入簾風 全

月日 出香 名乘

きゝて是に准すへし

納涼香

香四種

水邊にて　三包ニ認

山路にて　右同断

木陰にて　右同断

風ふて　　　四包内一包試

右試香終て出香水色山路木陰の
九包ニ客風の香三包くはへ十二包出之
炷出す一二三ハ十炷香のことく札も通し
客香ハ試ニ合セ何時も正札ニ書し風の

不審時ハ其香の上ニ下書てハ点あり
又客香時ハ其上下外書て又点拾ヶ一
点ニ准して記の表ニて慎知有無し丸
のことし

納涼香之記

水山風山水風風木木水木

札[illegible] 水山風山水風風木木水木 全

札[illegible] 水宋風木山水水木風山風 三

札[illegible] 水宋風宋木風山水風水 七

月日 出香 名乗

きろく七ト准ミ勝

晩夏納涼香

香四種

一ゝゝて　四包、此内一包試

二ゝゝて　右同断

三ゝゝて　右同断

客して　一包ニ懐ニ試

実和ニ一二三の試香ニ陳迄先出香十
包を取交て炷出し十炷香のてらし札を
打畢十包出して次に試香を一分
頃ニ炷出して一二三を名乗て出すべし

試三種を終りて名乗紙ニ書付出すべし
さて又一の札を入る香は試それ
二の香なり二の札打たるは三の香三の札
打たるは一の香なしは客の香は何香と
おまへは或は五香のに出てしまゝ三の香一種は

不出ものは客の文字三番目に書一二ともそ
れぞれ書なして知るなり一二三の香一種
づつ有り不残出たるハ四番目より十番目まで
も客の文字にて四番目に書なり客札ハ
無試新組もすべし後記法にハ出香

二三ウ一にて出たるハ其試字なり四字書
付出すなり試香として香出初るを
云右の如くの組ハ後二種づつ六種組ても
立るなり其外草体に書しかるなり後記
録の條紙又ハ立るにて続しの名寸組香

至て十分ならざる故正保と分
つ半分の低きあり張は初十位全たるが
後の試あまたあれハ又乗低子は合せ足は
もあるゑ足正子はけもきもし足らるゝ
たる色の十足がしこえたも正するるれ

後点因おきれい点はある者後心を
付て出たれハ誤ありける能く出くる此の
香晩集納涼香と名付る半を
左の詩歌による
池冷水無三伏夏　松高風有一聲秋

吉川濱の岩ねの水を結ひあけて
夏なきとしにおもひぬるかな

右の詩歌によりて記わりにて
初客のきまりて詩の上句を本香の下ニ書
又一二三の香出ハ捨札ニ客香いれに
下の句を書 一三三の次ニ出たる出香の
下ニ歌一首書 捨客の時ハ記録の奥ニ
歌書なし 詩ハ両句とも本香の下
あるへし 記の前をも可考 左のごとし

晩夏納涼香之記

二二二一ウ三三二三 松高風有一聲秋

此等ノ点法
三人共法ニ
叶ナリ

名　一三三三一二二ウ三　二一三ウ　二

名　一三二一二三ウウ一ウ　三三ウ一　一

名　一三二一三三ウウ一ウ　二一ウ三　全

月日　出香　名乗

記録之事准之

一三ウ一三二二二一三　ト書なと

是ハ点ニナルナリ

一二十三二二三三ウ一　一三三ウ

是ハ点ニナラス

一ヲ二一ヲ三一ヲ二

是ハ点ニナル

一ヲ二一ヲ三一ヲ三

初ノ出ヨリ聞被スシハ点ニナラス

是ハ点ニナラス

三ヲ二一ヲ二一ヲ二一ヲ二

香ノ出ノ初ヨリハ聞ルメ尻初ニ
ミサニト折タル故点ニナラス也

氷室香

香五種

冬の名残と名付　三包内一包試

消ぬ氷と名付　右同断

松の下風と名付　右同断

千年の矢と名付　二包ニ限て試

各々名付　右同断

右試香三種ぬきて　本香七包の内ちゝせ

の香二包客二包合て四包を交内二包

除き残り二包と結ひ合五一二三の香三包

と打交焼ぬく　次ニ右結ひ有香と打交

焼出名乗ニ寄て焼識ハ合名乗紙ニ書付

出香ハ名乗ぬくの二焼ニ同香と見候ハ松

嶋と七文ニ焼もし別香と見候ハ律野

と書付ル也　組限紙ハ左の通と之合考

認得ハ右跡の二炷同香にてウウと出るハ
中寄より二包つゝ又客ウと出る時ハ
生香の下に渚の歌を一首書留し左の
ごとし

渚かやにおまし守るおきさゝえける
氷室そ今ハゆきもをしけり

又二炷同香にて千年比とて出たるは
松が嶺の歌を書留し

凍みても千とせの長は消えやらす
まつかさの氷室そありける

別香の時にて歌書に不及し仁探の句そへて考
左のごとし

氷室香之記

二 一 三 ウ ウ

此香ハ古歌ニ山寺ノおさめる
氷室を合し（？）たるなり

名 冬の名残 消ぬ氷 松の嵐 波の音 一 二

名 消ぬ氷 冬の名残 松の下風 松の嵐 全

月日 出香 名乗

きゝ之ニ准すへし

七夕香

香七種

雲として　二包ゝ但内一包試

月として　右同断

扇として　右同断

糸として　右同じ

竹として　右同じ

前
織女として　一包を焼

後
牽牛として　右同じ

右試香五種終て　本香七種打交牽

牛織女出るまでまはり一炷をひきまはり

牽牛織女の二種出次第に香記に為

記録の表は両方左のごとし

七夕香之記

月
糸
織
竹
雲
牽

札点　糸有月織雲霏　二

札点　月ゝ糸ゝ織ゝ竹ゝ雲ゝ霏　全

札点　月ゝ霏ゝ織ゝ竹ゝ雲ゝ有　四

月日　出香　各乗

きゝく花ニ准ず

霏ニ織の記織ニ霏の記有て記点ニする也

此ノウニ霏牛の記打之浅深湯を存れ点ハ減れ也

替千種香

香三種

一ゝゝて　三包ツヽ作内一包試

二ゝゝて　四包ツヽ作同断

ウゝゝて　一包ツヽ作不試

右試香二種終りて出香六包打まぜ炷
出し候し試に合れ出候又は始香と
春秋にわかちて組方始るわり前の式ハ
秋の組とわり春ハ左のごとし
一とりて　一包ゝ試

二とりて　四包ゝ試内一包試
ひとりて　三包ゝ試同断
右のとほりに始香し一とゝ客に入るわり
記録の墨子歌一首書出し其季の歌
取し但春夏ハ春の部まて秋冬まて

秋の部に書分し此低の音と申なる
人の字の下に名目あり春にれ山桜と
書秋すれ白露と書分ほとんる
歌左のこゑし

春のこと

見わたせは色のちくさにうつろひて
尾花にそよく山まてしかの声

秋のこと

さくらぬ野への ちくさの花よ
いろさまさまの秋のきりつほ

右の歌一首二行に書分したる証の歌にて
可考 左のこゑし 秋に侍る

替千種香記

札〈名〉 二ウ二一二 白露 全

札〈名〉 二二二ウ二 三

みだれあふて野邊の千種の花の上に
うちかゝる秋のしらつゆ

月日

出香 名乘

まかくしほれてさきへまきみ

秋夜香

香四種

秋夜と名付　四包の内一包試

白雲と名付　三包の内二試

雁と名付　二包の内一包試

月之名付　一包焼之式

右式終りて本香八包の内秋夜三包白雲
三包以上六包を交合せ交焼出して
終りて記紙に書出して是を先記録に
写し置後暦月の二包交焼出て
是終りて記紙に書出して暦月の香
前後出しより聞て後記録の面に
続して写
先之交る秋夜白雲の香記録に
本香終りの時に写し後月暦

の出やうにて　五文字　月香の字出なし
歌の上の句と中の中段の文字居なし
出なく下の句と書くし　右不出ハ不書
此出の人にて　歌一首書くし　又ハ秋夜
白雲の香　一種ならず出ハ　後の二種出し

下は其も不書　又始の字此出にて後
不出ハ其まゝし　歌左のごとし
声をすまそ　相ちかへし　雁乃
くもゐる声　秋の夜の月
右の歌の心ニて　紀所なり　紀洞なのこし

秋夜　白雲　ウ　月

秋夜香之記

秋雲秋秋雲雲　月ウ

名　雲秋秋秋雲雲　隠月　四

名　秋雲秋秋雲雲　隠月　六

名　秋雲秋秋雲雲　月隠　白雲の[illegible]

全

記録光子准之筆

月日

出香　名乗